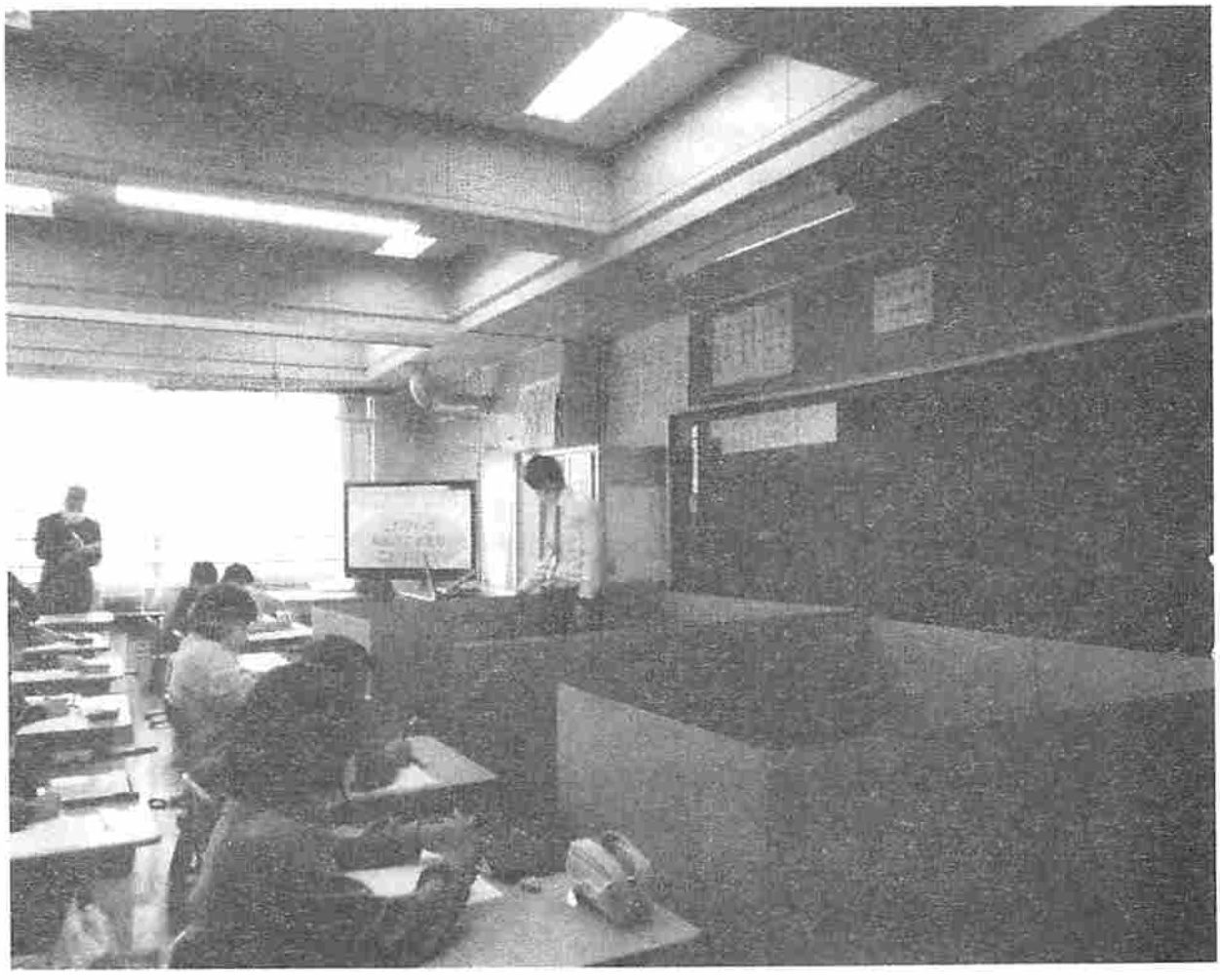
第７３次　印旛地区教育研究集会
（社会科教育・小学校）

地域社会への参画意欲を高める社会科学習
～４年「自然災害からくらしを守る」を通して～



四街道市立和良比小学校
荻原　駿太

1　研究主題

地域社会への参画意欲を高める社会科学習 ～4年「自然災害からくらしを守る」を通して～

2　主題設定の理由

（1）学習指導要領から

本単元は、学習指導要領の以下の内容に基づいて設定したものである。

（3）　自然災害から人々を守る活動について、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　次のような知識及び技能を身に付けること。

(ア)地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解すること。

(イ)聞き取り調査をしたり地図や年表などの資料で調べたりして、まとめること。

イ　次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア)過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、災害から人々を守る活動を捉え、その働きを考え、表現すること。

本単元の内容は、主として「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」に区分されるものである。第3学年「地域の安全を守る働き」の学習を通して、地域の安全を守るには関係機関に従事する人々が相互に連携し、地域の人々と協力して火災や事故などから人々の安全を守っていることを学んできた。この学習を生かし、本単元では災害に対して過去から学び、今後想定される災害に対して関係機関がどのように連携しているのか、また、地域の一員として自分には何ができるのかについて考え、理解を深めさせたい。

（2）印教研研究主題から

よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習 ～自ら課題をみいだし、自らの考えを表現できる児童生徒の育成をめざして～

本研究は、印教研研究主題を受けて設定している。「よりよい社会の実現」のためには、一人一人が課題に対して意見を持ち、意見交換することで、一人だけでは考えることができなかった新たな意見を見つけていくことが不可欠であると考える。本研究では、過去の自然災害や関係機関の働きを学んでいく中で、自ら課題をみいだすことができると考える。また、タブレット端末を積極的に活用していくことで自らの考えを表現しやすくすることができると考える。

（3）児童の実態から

本校は、平成3年に創立し、四街道駅から徒歩圏内の30年弱を経過した新興住宅地に位置する。宅地造成もある程度落ち着き、計画的に整備された道路や広い公園がある恵まれた環境にある。児童は素直で明るくのびのびとしている。しかし、自分から先に相手に挨拶をすることが苦手な児童や、友達との意見の相違から起こるトラブルの解決に進んで取り組もうとしない児童など、主体的に行動できない児童も見られる。

本学級の児童は素直な児童が多い。人に対しても物事に対しても、初見のことやあまり知

らないことに対しては一歩引いて様子をうかがう一面もあるが、慣れたり、詳しく知ったりすることで進んで取り組むことができるようになってきている。昨年度末に実施した千葉県標準学力検査では、千葉県平均より社会科は２点近く上回ったが、国語科は１点下回った。書くことや資料の読解に対して苦手意識が強く、正確に読み取ったり、読み取ったことから考えたりする力が弱い。また、学習上の困難さを抱える児童も多く、成績分布を見ると二極化している。そのため、授業では小グループで互いに助け合ったり、教え合ったりする活動を多く取り入れている。

実態調査から７８％の児童が社会科の学習が楽しいと回答している。また、社会科の学習の中で「調べること」「まとめること」「発表すること」のそれぞれについて楽しいかどうかを問うと、「調べること」は７５％、「まとめること」は６４％、「発表すること」は６０％が楽しいと回答した。このことから、社会科で新たな知識を獲得することに対して楽しさを感じているが、資料の読み取りやそこから自分の考えを持つことを求められる「まとめること」や「発表すること」については、自分の考えに自信が持てず、苦手意識を持っている児童が多いと考えられる。

「災害」にはどのようなものがあるかの問い（複数回答）には、「地震」と回答した児童が半数以上と最も多く、次いで「津波」が３割、「台風」「火事」が２割であった。学校でも３月１１日には地震や津波について担任から聞いて、黙祷の経験があったり、２０２１年３月は東日本大震災から１０年の節目として各メディアで例年以上に取り上げられることが多かったりしたことから、児童は、生まれる前のことだが東日本大震災について少しは知識があると考えられる。また、３名の児童は「分からない」と回答したことから、「災害」という言葉の意味を確認する必要がある。家で災害が起きたときの準備をしているかの問いには４割の児童が「準備をしている」と回答し、準備しているものとしては水や持ち出しバッグ、懐中電灯が多かった。地域の避難所開設訓練が和良比小学校を会場として実施されていることは４名の児童が知っているだけだったが、この４名は参加したことはなかった。これは、この訓練が令和２年度は新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から未実施、令和３年度は規模を縮小しての実施だったことも影響していると考えられる。

３　主題について

現代社会では、核家族化が進んだことによる近所づきあいの減少が見られる。そこに、新型コロナウィルス感染症予防のためのソーシャルディスタンス、宅配サービスや在宅ワークの普及などによって、他者との関わりの減少が進んでいる。それは、新興住宅地に位置する和良比小学校でも同様である。しかし、有事の際に自宅が損壊し避難所生活を送ることになれば、自分の家族だけでなく、近所の人と共同生活をすることになる。近所付き合いが減っている昨今においては、避難所で助け合うどころか互いにストレスを高めながら生活するケースが出てくると考えられる。有事の際に助け合ったり、円滑なコミュニケーションを取ったりすることができる関係を作っておくためにも、地域社会に関心をもつことはとても重要である。

本単元において「地域社会への参画意欲」が高まった状態とは、近所の人や登下校時のボランティアの方などに進んで挨拶をすることや、防災訓練をはじめとした地域の行事に参加

してみたいと思う気持ちをもつこととする。毎時間の振り返りを定期的に確認していくことで、地域社会への参画意欲についての記述内容がどのように変化していくかを追っていく。

4　教材開発について

自然災害の多い日本の中でも、地震は特に多く、最も身近な自然災害である。２０１１年３月１１日に東日本大震災が発生し、千葉県内でも最大震度６弱を観測した。また、２０２２年現在、東京を中心とする首都圏においてマグニチュード７以上とされる首都直下型地震が発生する確率は３０年以内に７０％以上（地震調査研究推進本部地震調査委員会）とされており、千葉県においても大きな揺れに襲われることが想定されていることからも、人々の中で地震に対する意識は高まっている。しかし、au コマース&ライフの調査によると、自身の災害への備えが不十分と考えている人は８割近くいることや、避難警報が出た際には近所の人の行動を見てから動く人が多いことが分かる。このことから、災害が起こることは分かっていても、実際に起こったときに自分一人で解決することは不可能であるため、地域との関わりは重要だと言える。

四街道市では「四街道防災ハザードマップ」を運用している。その中で「千葉県北西部直下型地震」が発生した際、四街道市は震度６弱から６強の地震に見舞われると想定されている。気象庁の「震度データベース検索」で過去の震度記録を見ると、四街道市では震度５強以上の揺れを観測したことは一度もないことが分かる。また、震度５弱の揺れについても２０１１年３月１１日の東日本大震災のみとなっている。

直近で児童が経験した災害としては、２０１９年９月に上陸した台風１５号が挙げられる。関東地方に上陸した台風として観測史上最強とされているこの台風によって、四街道市内でも建物や看板等の損壊があった。本校においても校庭の木が倒れる被害があり、台風が去った後も１週間近く停電による避難生活を余儀なくされた家庭もあった。

これらのことから、２０１１年以降に生まれているため大地震を経験したことがない児童にとって、大地震による災害について考えることは難しいと言える。そのため、「つかむ」部分では過去の台風の経験をもとに、災害の怖さや大変さについて確認をする。そして、「調べる」部分では、災害が発生した際の行動や何を備えておくべきかなどを、今後必ず経験する大地震についても台風の時と同様に考えていく。以上のように単元を展開していくことで、大地震による災害について想像しながら、自分事として自分にできることを考えていくようになると考える。

5　研究目標

過去の地震災害と関係機関の連携について調べ、児童同士の対話的な学習を通して地域の一員として自分に何ができるかについて自分の考えを持ち、生活に生かすことができる。

6　研究仮説及び手立て

【仮説１】

児童にとって身近なものを教材とすることで興味関心が高まり、主体的に学習に取り組むことができるだろう。

手立て①　ICT機器を活用した資料提示

単元の導入時に、大地震が起こった時の町や家の被害の様子や、救助にあたる人々には警察や消防だけでなく地域住民もいることが分かる写真を提示したり、今後どのような地震が起こると言われているかを、PowerPointで視覚的に提示したりすることで、本単元に対する児童の興味や関心が高まると考えた。また、自作の教材をMicrosoft Teams上にアップロードし、タブレットを活用した調べ学習をすることで、主体的に学習に取り組むことができると考えた。

手立て②　ゲストティーチャーの活用

現在の四街道市や和良比小学校区の現状や課題、実際に地震災害が発生した時の避難の流れなどを、四街道市役所危機管理室の担当者や、和良比小学校で実施をしている避難所開設訓練の事務局の方の話を聞くことで、自分たちに何ができるかを意欲的に考えることができると考えた。

【仮説２】

「自分に何ができるか」を考えることを学習の軸として進め、自分の考えを可視化して話合い活動を行えば、考えを深めることができるだろう。

手立て③　毎時間「自分にできそうなことが見つかったか」をふり返る。

授業のふり返りを毎時間行うことで、学習内容の確認と、自分にできることは何かをふり返ることができるようにする。その際、アンケート作成ツールであるMicrosoft Formsを使って短時間で振り返りができるようにする。毎時間同じフォームを使用することで、同じ基準でその日の学習に対する自己評価と振り返りをすることができると考えた。

また、学習終了後も児童の意識が地域に向いているかを確認するために、単元の初め、単元途中、単元終了時、単元終了２か月後、４か月後の計５回定期アンケート調査を実施する。

手立て④　タブレットを活用し、自分の考えを可視化する。

単元の終わりに、今の和良比地域に必要なことは自助・公助・共助の何かを考える。その際に学習ソフト「ミライシード」のオクリンクの機能を使って、タブレット上に自分の考えをまとめて共有し、話合い活動をする。こうすることで、より多くの友達の意見に触れたり、自分の考えをさらに深めたりすることができると考えた。

7　研究の実際

（１）単元の目標

・調べたことを年表や図表、文などにまとめ、地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解する。（知識及び技能）

・自然災害が発生した際の被害状況と災害から人々を守る活動を関連付けて、その働きを考えたり、学習したことを基に地域で起こり得る災害を想定し、日頃から必要な備えをするなど、自分たちにできることを考えたり、選択・判断したりして表現する。（思考力、判断力、表現力等）

・学習したことを基に地域で起こり得る災害を想定し、日頃から必要な備えをするなど、自分たちにできることを考えようとしている。　（学びに向かう力、人間性等）

（２）単元計画（全９時間扱い）

学習過程	時配	学習内容と学習活動
つかむ	1	「地震が起きたら」 ・自分たちの住んでいる千葉県では、過去にどのような地震災害が起こったか知っていることを発表したり、年表や過去のデータから調べたりする。
	1	「地震とわたしたちのくらし」 ・地震が自分たちのくらしに与える影響や気づいたことについて話し合い、疑問から学習問題と単元計画を作る。
		地震からくらしを守るために、だれがどのようなことをしているのだろうか。
調べる	1	「家庭でそなえているもの」 ・家庭では地震に備えてどのような取り組みをしているか、調べてきたことをまとめる。
	1	「学校や通学路でそなえているもの」 ・学校や通学路ではどのような準備や対策をしているか、調べてわかったことを地震が起きる前と起きた後に分けて話し合う。
	1	「市の取り組み」 ・四街道市ではどのような準備や対策をしているか、調べてわかったことを災害が起きる前と起きた後に分けて発表し合う。
	1	「市と市民の協力」 ・四街道市の取り組みや、四街道市と地域住民の連携についてゲストティーチャー（四街道市役所危機管理室）から話を聞く。
	1	「住民どうしの協力」 ・住民どうしが協力してつくっている地域の防災組織についてゲストティーチャー（避難所開設訓練事務局）から話を聞く。
まとめる	1	「地震からくらしを守る取り組みをまとめる」 ・家や学校、市や地域の取り組みについてわかったことや考えたことをワークシートにまとめる。
		地震からくらしを守るために、さまざまな人が関わっている。

い か す	1	「これからの和良比に必要なこと」 ・学習してきたことから、地震からくらしを守るために必要な取り組みは何かを考え、話し合う。

8　仮説の検証

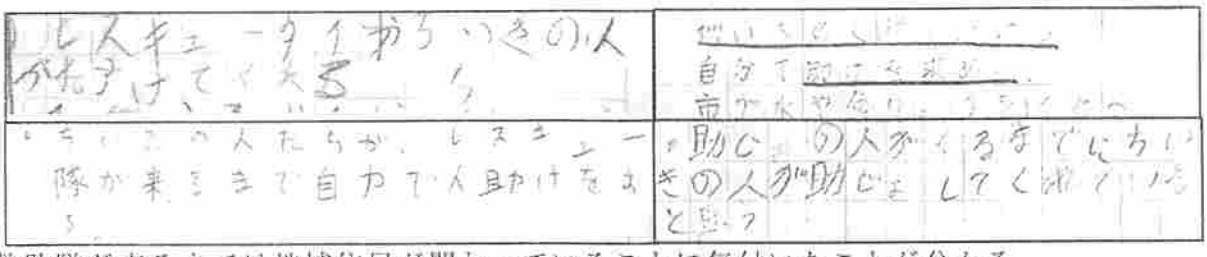
【研究仮説１】

手立て①　ICT 機器を活用した資料提示

１時間目に、過去の千葉県で発生した地震の記録を調べた後、今後千葉県で大地震が起こる確率が高い事を PowerPoint 資料で提示した。

これらの感想の記述から、地震に対して対策をする必要性や、大地震が起こった時には何をすればいいのかという事についての興味や関心を高めることができたと考える。

２時間目では、学習計画を立てるために、地震被害の大きさや救助活動にあたる人達へ関心を向け、地震発生時に誰がどのようなことをしているのか予想をさせた。警察、消防だけでなく、地域住民も救助やがれきの撤去の手伝いをすることもあるという事に気付かせるため、倒壊した家屋で作業をしている人達が映っている写真を提示した。（資料編：資料１）



救助隊が来るまでは地域住民が関わっていることに気付いたことが分かる。

以上の事から、視覚的資料を提示することで、児童の関心が高まり地震発生時にどのような人が関わっているのかを考えることができたと言える。

Teams を活用した調べ学習として、事前に表や画像、Microsoft Sway を使用して作成したページなどの資料を Teams に投稿して調べさせた。Sway を使用したページは分かりにくい言葉を言い換えたり、漢字をひらがなに直したりすることができたため、インターネットサイトを使用するデメリットである不確実な情報があることや漢字や表現が児童には難しいことなどを解消し、正しく理解することができた。（資料編：資料２）

手立て②　ゲストティーチャーの活用

四街道市役所危機管理室の方と、避難所開設訓練の事務局の方には、事前の打ち合わせで「子ども達が地域に目を向けられるようにしていきたい。」という旨を伝えた上でゲストティーチャーとして話をしていただいた。

公助だけを頼りにしていても、長い期間避難が必要になると困ってしまうから、自助も大切なんだよ。

避難所では、子どもからお年寄りまで一緒に生活をするから、みんなが自分にできることを探すことが大切だし、普段からの近所づきあいも大切にしてくださいね。

～四街道市役所危機管理室の方の話を聞いた際の児童の感想（Forms の振り返りより）～

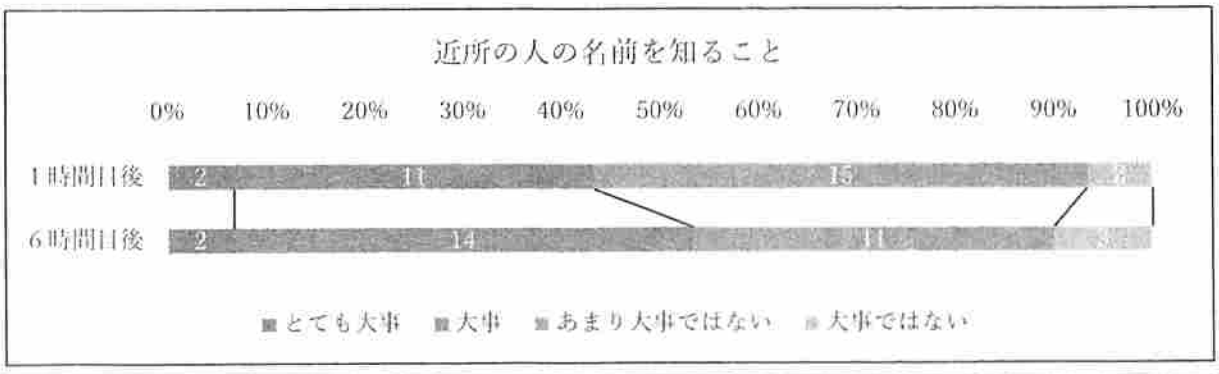
・自助、共助、公助の関係がよく分かった。
・助け合いが大切ということがわかった。
・協力しないと、ひなんした時に大変になることが分かった。
・自分にもできることがあるということが分かった。

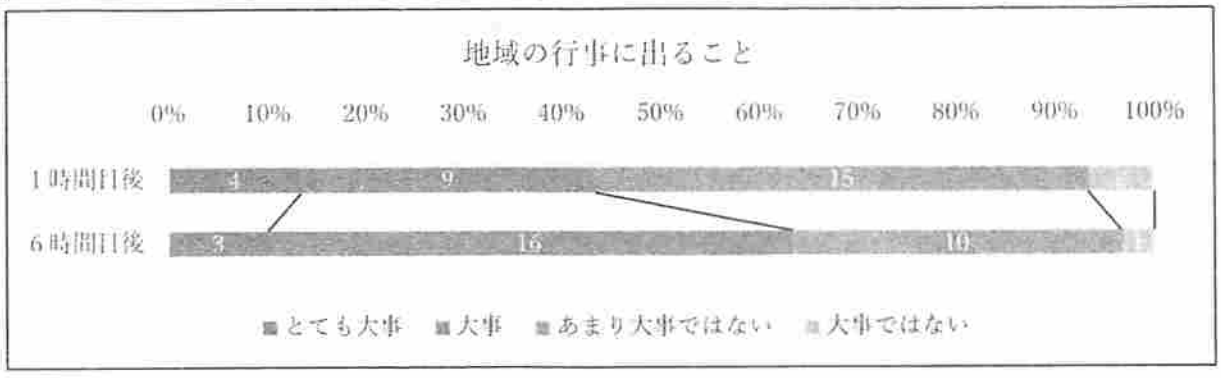
和良比小避難所の活動は、学区の８つの自治会が連携してやっています。今年で９年目になります。
災害はいつ起こるかわからない。私達だけではなくて、みんなで力をあわせて対策をしていくことが大切です。
まずは、友達や家族同士、近所の人とも話し合って、できることを考えていきましょう。

～避難所開設訓練の事務局の方の話を聞いた際の児童の感想（Forms より）～

・地域の大切さがわかったから、避難所訓練に参加しようと思いました。
・共助についてもう少し調べてみたい。
・自主防えい隊という組織があり、いろんな班に分かれて活動しているのを知れた。
・住民同士が協力しないと、避難所はできないことがわかった。

市役所の方や、避難所開設に関わる地域に住んでいる方から話を直接聞くことで、自分たちが地域の一員であるという意識が高まった。





定期調査の結果、近所の人の名前を知ることや地域の行事に出ることなど、地域に参加することに対して「とても大事」「大事」だと答えた児童が増加した。（資料編：資料３）

これらの結果から、市や地域の方にゲストティーチャーとして話を聞く機会を設けることで、学習の意欲や地域社会への参画意欲が高められることが分かった。

【研究仮説２】

手立て③　毎時間「自分にできそうなことが見つかったか」をふり返る。

～毎時間の振り返りの結果（資料編：資料４）～

【３時間目（家庭での対策）】
- 防災グッズがない家庭への手伝い
- 他の家の人の食料が尽きたときに、分けてあげる
- 地震が起きたら近所の人と一緒にひなんする。

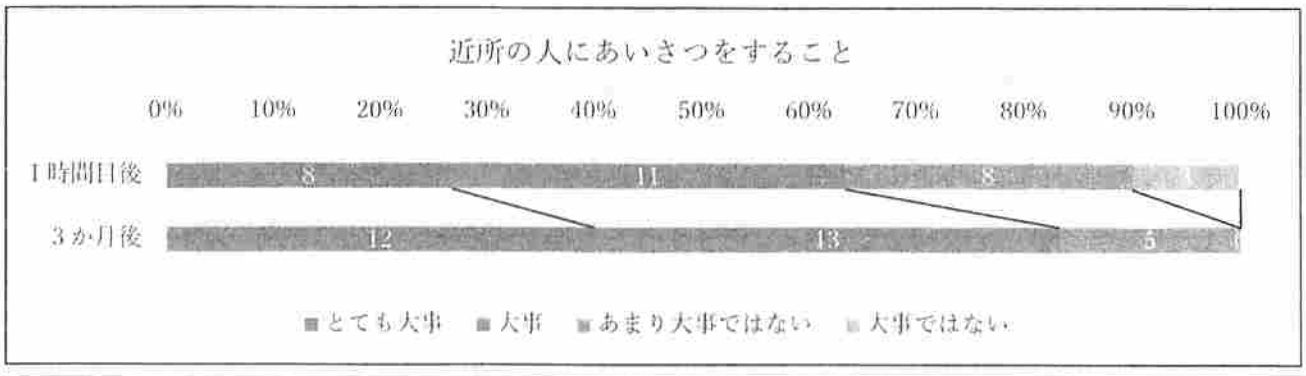
【９時間目（単元終了）】
- 挨拶などの簡単なことならできる。
- あいさつしたりしながら、地域の人との交流をふやしていきたいです。
- 助けが必要な人がいたら大人を呼ぶ。
- 自分の対策やみんなで助け合う事。

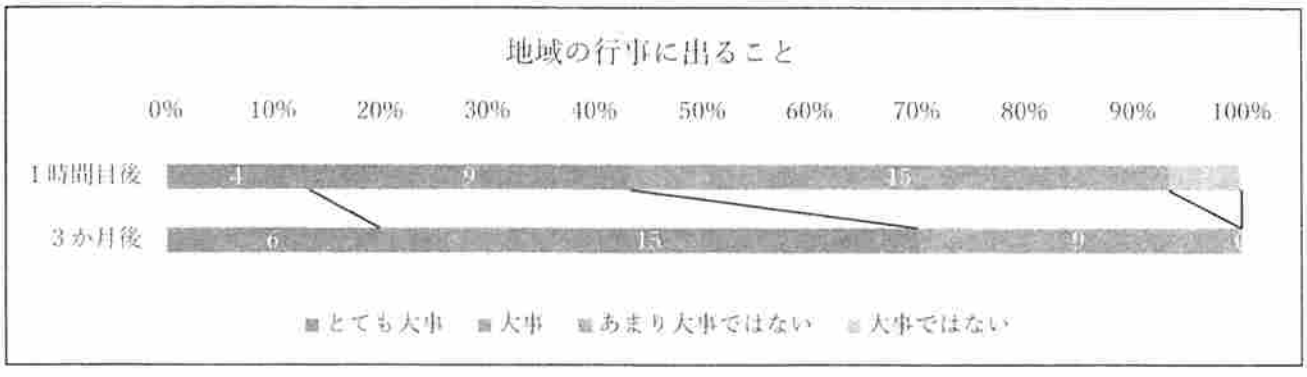
１・２時間目の段階で地域に目が向いている児童は、家庭での対策を調べた３時間目から近所の人と一緒に避難することができると考えていた。ゲストティーチャーの話を聞いた６時間目あたりから、自分にできそうな事が具体的な内容として出てくるようになった。単元終了時には「挨拶をする」「行事に出る」といった具体的な行動を記述する児童が増えた。

３時間目の段階では５人程度が記述するのみだったが、最終的には半数以上の児童が自分にできそうなことを記述することができるようになった。

～定期アンケートの結果から（資料編：資料３）～

毎時間の振り返りで出てきた「挨拶をする」「行事に出る」の項目について、単元開始時と単元終了後４か月後を比べた。





単元終了後も挨拶をすることや地域の行事に出ることの項目は大事だと感じる児童が多く、どちらも「大事ではない」と回答する児童は０になった。

以上のことから、毎時間同じ質問項目を設けたことで、児童は自分にできそうなことを考えながら学習に取り組むことができたと考えられる。

手立て④　タブレットを活用した、自分の考えの可視化

９時間目の学習では、タブレットで使用する学習ソフト「ミライシード」の「オクリンク」の機能を活用した。教師が児童に「自助」「共助」「公助」のカードを送信して、児童には自分が大切だと思う順番に並べ替えをして、オクリンク上で提出させた。その後、話合い活動に向けて自分がその順番に並べ替えた理由をノートに記入させた。こうすることで、自分の考えを簡単にまとめることができたため、その理由を考える時間を多くとることができた。

話し合いを始める前に大型モニターに、オクリンクに提出された全員の考えを提示した。その際に、カードを事前に色分けしておくことで、自分の意見は多数派なのか少数派なのか一目で分かり、話し合い活動では、友達の考えを受けて自分の考えを述べたり、同じ意見を持つ友達の後に続いて意見を述べたりすることができていた。

【７時間目まで】
・知らない防災グッズもあったから、家で使ってみたい。（３時間目）
・学校にはいがいに対策されている所が多かった。（４時間目）
・四街道市は避難してきた人たちの食料や水を用意しているとわかったから、紹介したい。（５時間目）
・地域で協力することが大切だと思いました。（６時間目）
・協力することが大切だとわかった。（７時間目）

【９時間目】
・自助・公助・共助の全部大事だと思いました。（他７名）
・友達の意見を聞いて自分の家で準備をしないといけないと思った。（最初に公助が大切だと思った児童）
・今はまだできないこともあるけれど、自分のできることを考えていきたい。（最初に公助が大切だと思った児童）
・どれも大切だけれど、一番大切なのは自助だと思った。

毎時間の振り返りを見ると、７時間目まではその日に学習した内容から自分にできることや感想を書いている児童がほとんどだった。９時間目の振り返りを見ると、２つの視点から自分にできることを書いたり、どれも大切だと考えたりする児童が多かった。また、子供にはできないこともあるという事に気付いた児童もいた。（資料編：資料４）

これらのことから、自分の考えを可視化した上で話し合い活動をすることは効果があったと考えられる。

しかし、話し合いの際に出てきた意見を板書に残さなかったため、聞き取ることが苦手な児童は自分の意見は出せたが、考えを深めることができなかった。

９　成果と課題

＜成果＞

・ICT 機器を活用して資料提示をすることで、児童は主体的に学習に取り組むことができた。
・市役所や地域の方にゲストティーチャーとして話をしてもらうことで、地域の一員であるという意識を高めたり、自分にできそうな事を具体的に考えたりすることができた。
・毎時間振り返りで「自分にできそうなことはあったか」を問うことで、児童は自分にできそうなことを考えながら学習に取り組むことができた。
・自分の考えを可視化することで、互いの考え方を知った上で話し合うことができ、自分の考えをより深めることができた。

＜課題＞

・振り返りの結果を児童が簡単に確認できるような仕組みが必要だった。
　→児童自身が振り返り結果を確認することが困難だったため、単元を通してどのように自分の考えや意欲が変化していったかが分からなかった。
・地域とのつながりが児童の自己評価だけでなく、教員側も目に見える形でわかるようにしたい。
・考えを深めるために、話し合いの際に出てきた意見を残すことが必要である。

第７３次　印旛地区教育研究集会
（社会科教育・小学校）

地域社会への参画意欲を高める社会科学習
～4年「自然災害からくらしを守る」を通して～

資料編

資料１　授業で使用したPowerPointや写真資料　p.2～4

資料２　授業で使用した調べ学習用の資料　p.5

資料３　定期アンケートの結果　p.6～8

資料４　毎時間の振り返りの結果　p.9～11

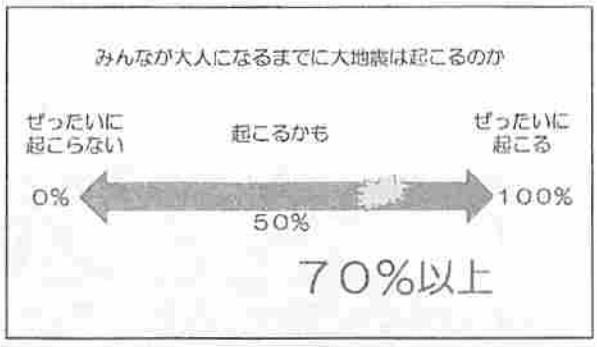
資料５　知識の構造図　p.12

四街道市立和良比小学校
荻原　駿太

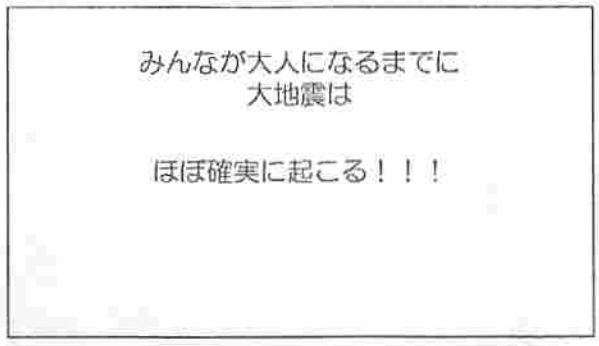
資料１　授業で使用したPowerPointや写真資料

１時間目の資料

地震について知っていることを話し合ったり、千葉県や四街道市の過去の地震について知ったり（資料３）した後に提示したPowerPoint資料。



【首都圏の大地震発生確率①】



【首都圏の大地震発生確率②】

「３０年以内に起こる」という言葉ではイメージしにくいと考え、「みんなのお家の人と同じくらいの大人になるまで」という言葉に置き換えた。また、確率の学習をしていないため、「０%は絶対に起こらない」「５０%は起こるかもしれない」「１００%は絶対に起こる」という目安を作り、児童に予想をさせて、７０%以上という結果を提示した。この資料は、９時間目の導入部分でも復習として使用した。

２時間目の資料

前時の振り返りとして１時間の資料を提示した後に、大地震が起こるとどのような被害が起こるのかを写真を使って提示した。街やインフラという大きなところから、家という身近に感じられるところに焦点を絞っていくように提示をした。

阪神淡路大震災時の写真からは、大都市で巨大地震が起こった際のインフラへの影響や地震の威力が分かるものを選んだ。

【高速道路が根こそぎ倒れる様子】

【ビルが倒壊する様子】

東日本大震災の写真は、地震だけではなく、地震による津波によっても被害が出ることや千葉県でも津波被害があったことが分かる写真を選んだ。

【津波発生前の様子】

【津波発生後の写真】

【旭市の津波被害の様子】

熊本地震は家屋への被害が多かったため、家屋への影響がよくわかるものを選んだ。

【１階部分が潰れた家】

【倒れかかっている家】

単元を通しての学習問題を引き出した後、救助や復旧作業をしている人が映っている写真を提示し、誰がどのようなことをしていると思うか予想を立てさせた。

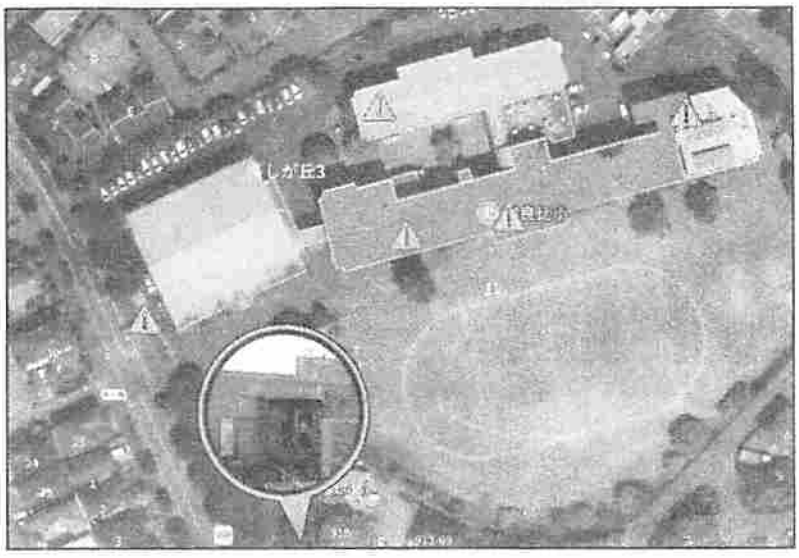
【阪神淡路大震災時の人々が協力する様子】

【新潟中越地震時の復旧作業の様子】

資料２　授業で使用した調べ学習用の資料

４時間目に使用した資料

学校や通学路でそなえているものを調べるにあたっては、総合的な学習の時間において学校内の安全設備や危険箇所について校内を歩いて調べていたことや、校外に出ると時間がかかってしまうことなどを考慮して、リンク付きのPDFを作成して調べさせた。

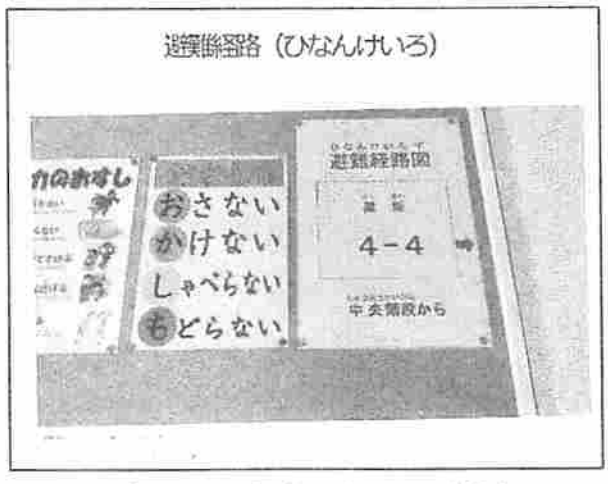


【使用したPDF資料】

「！」のついている場所が地震に備えているとした場所。また、下部にある丸い吹き出しは、通学路にある「和良比防災センター」である。「！」と丸い吹き出しをクリックすると、Microsoft Sway で作成したWEB ページに飛ぶように設定した。

Power Point に航空写真の画像を入れ、「！」のオブジェクトにハイパーリンクを挿入したものを、PDF化することで作成した。

【Sway で作成したページ①】



【Sway で作成したページ②】

Microsoft Sway を使用して、事前に撮った写真を挿入し、写真の下に説明書きを付ける形でページを作成した。インターネットを使用した学習と同じような気持ちで、興味をもって調べる児童が多かった。また、写真を拡大するなどして写真の細かいところまで調べる児童も見られた。

資料３　定期アンケートの結果

地域への取り組みについて単元の学習中だけでなく、学習後も取り組みや意欲がどれだけ続いているかを確認するために、１時間目、６時間目、９時間目の終了後と、１か月後（１２月）、３か月後（２月）の計５回、Microsoft Forms を使用して以下の内容で定期アンケートを実施した。

問１　自分の家で、地震が起きたときの準備をすること（自助に関する質問）

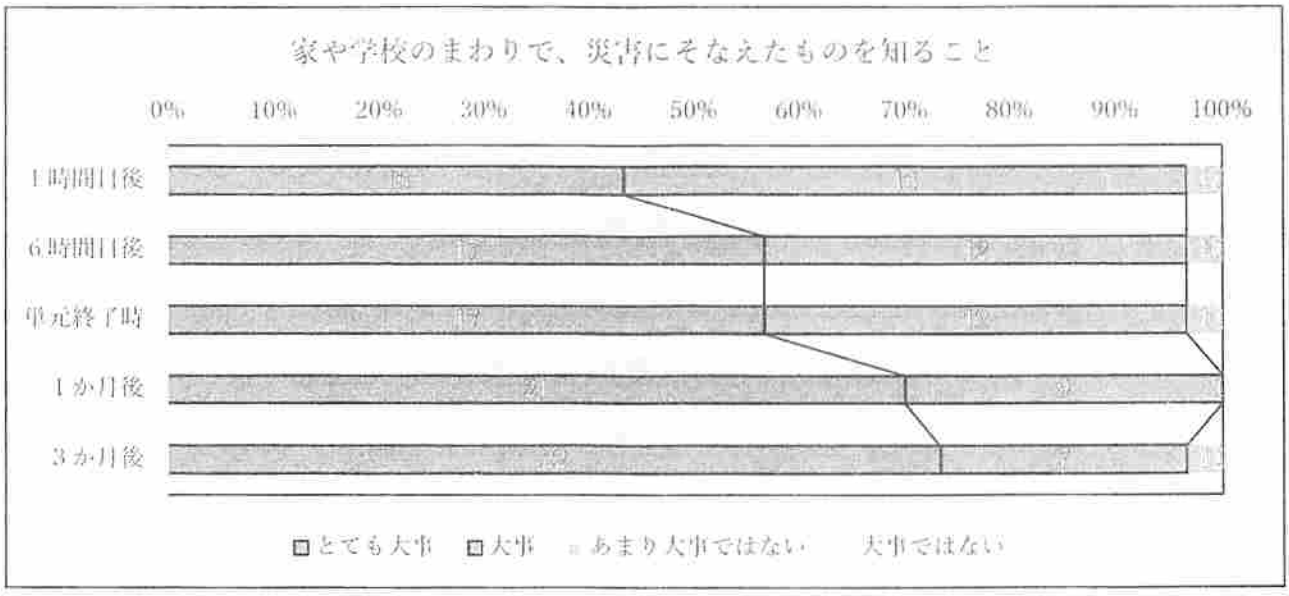
問２　家や学校のまわりで、災害にそなえたものを知ること（自助・公助に関する質問）

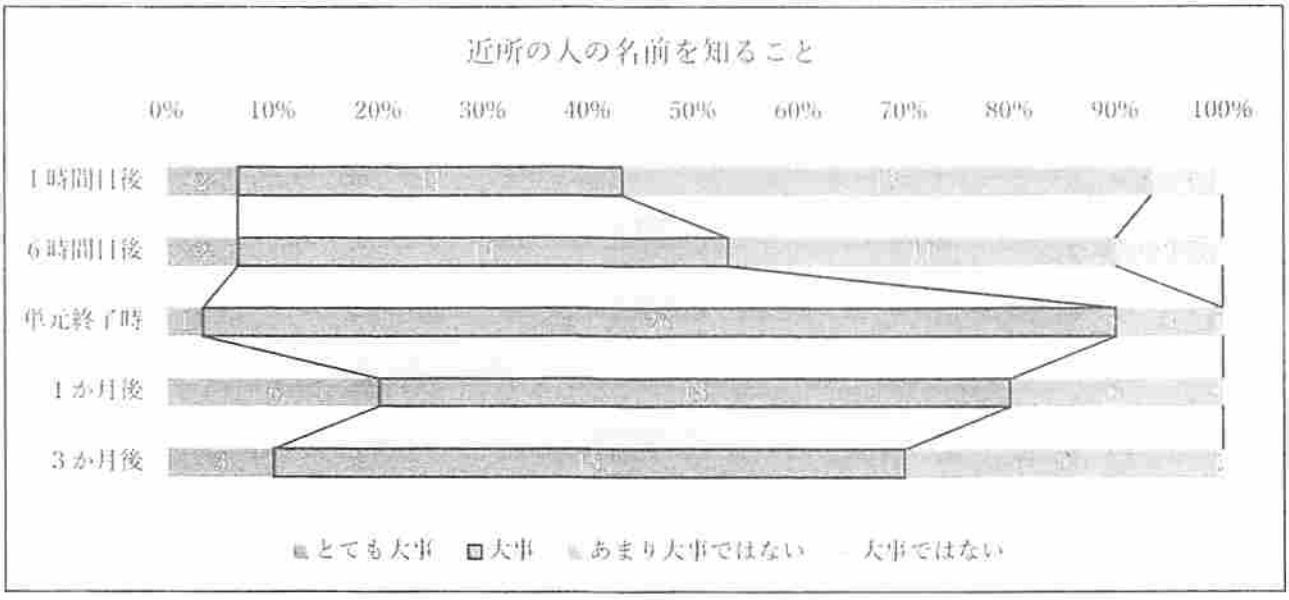
問３　近所の人の名前を知ること（共助に関する質問）

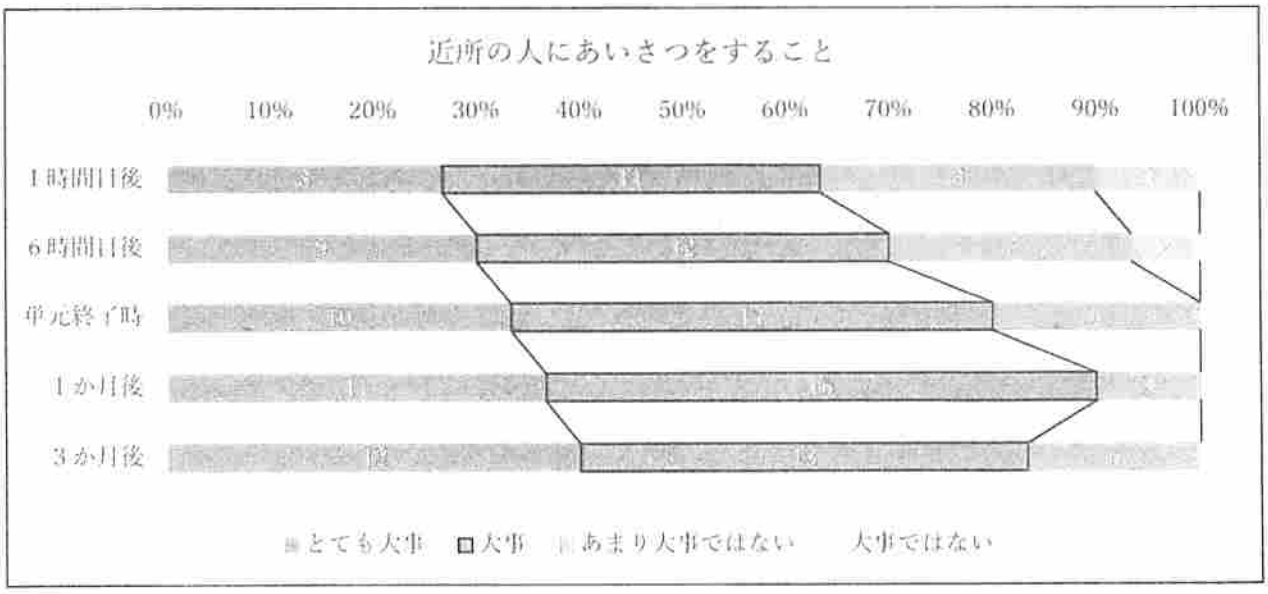
問４　近所の人にあいさつをすること（共助に関する質問）

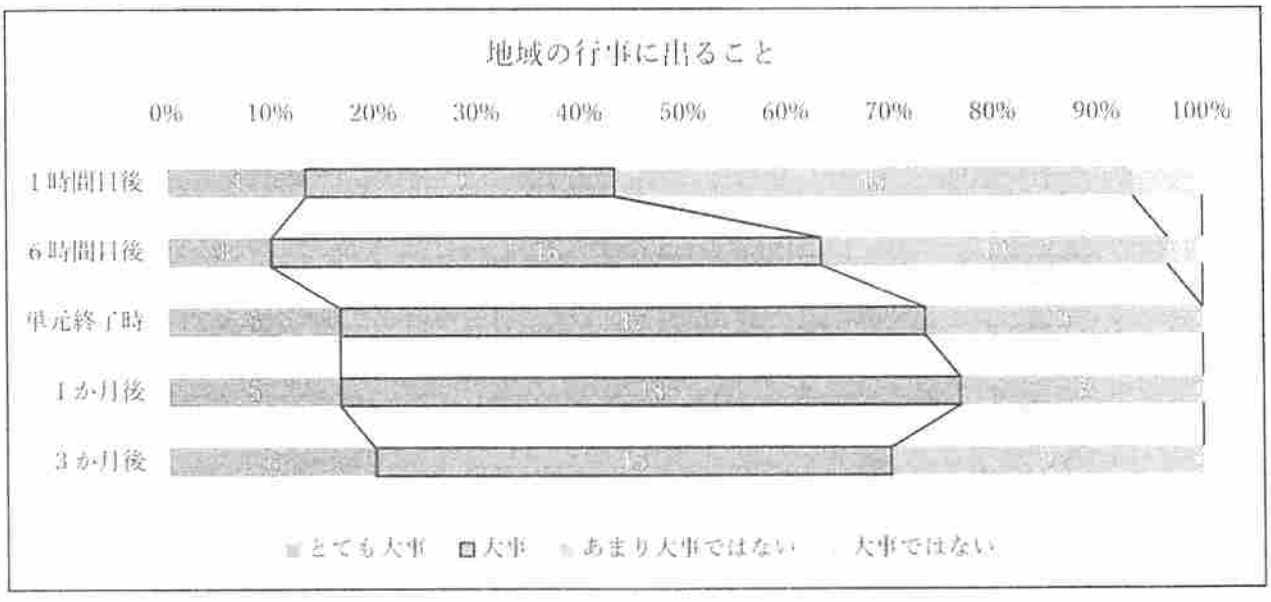
問５　地域の行事に出ること（共助に関する質問）

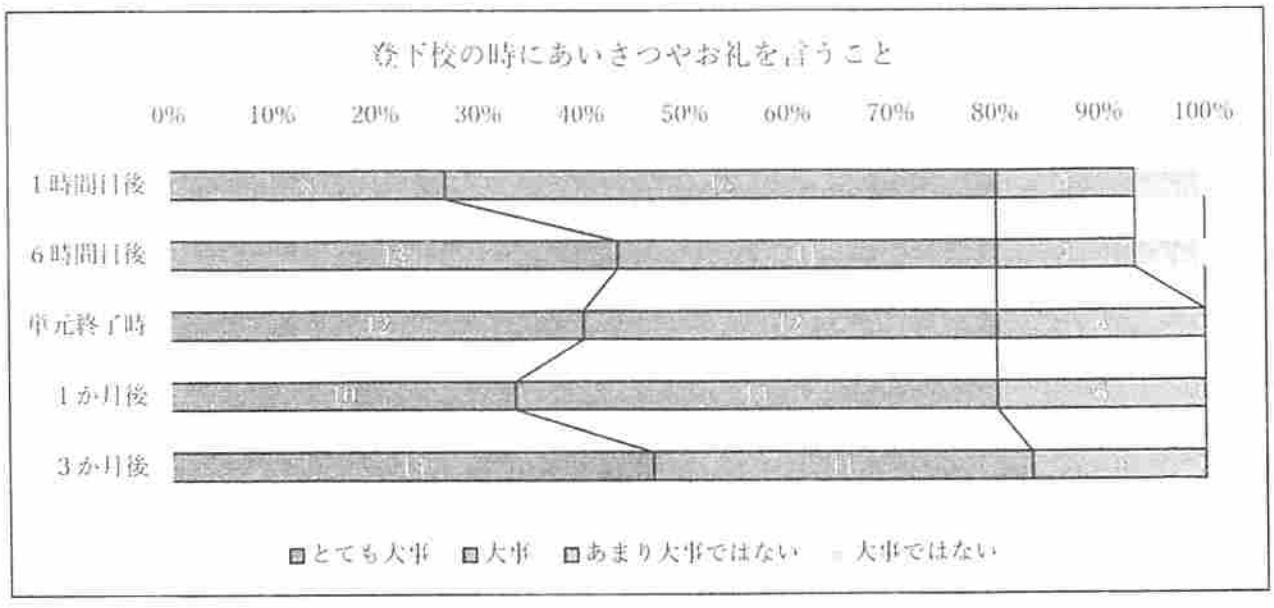
※「とても大事」「大事」「あまり大事ではない」「大事ではない」の４つの選択肢から回答。






近所の人にあいさつをすること
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
1時間目後
6時間目後
単元終了時
1か月後
3か月後
とても大事
大事
あまり大事ではない
大事ではない


地域の行事に出ること
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
1時間目後
6時間目後
単元終了時
1か月後
3か月後
とても大事
大事
あまり大事ではない
大事ではない


登下校の時にあいさつやお礼を言うこと
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
1時間目後
6時間目後
単元終了時
1か月後
3か月後
とても大事
大事
あまり大事ではない
大事ではない

身近にある災害に備えたものを知ることについては学習開始時から大事だと思っている児童が多かった。学習を通じて、災害に対する意識が上がったことから、「とても大事」だと考える児童が増えたのではないかと考えられる。

地域に対する取り組みについてみると、「近所の人の名前を知ること」を大事だと思った児童は単元終了時が最も多くなり、その後は減少傾向になった。近所の人に挨拶をすることの大切さや行事に出ることの数値は回を追うごとに上がっていったことを考えると、学習を通じて大切さを感じ、実際に近所の人の名前を知った可能性もある。

最終的に、どの質問項目も「大事ではない」と考える児童が０になったことから、災害に対する意識や地域に対する意識は上がったと考えられる。

資料４　毎時間の振り返りの結果

毎時間 Microsoft Forms を使用して振り返りをした。

問１　今日の授業はどうだったか（授業全体を通しての自己評価を５段階でとる）

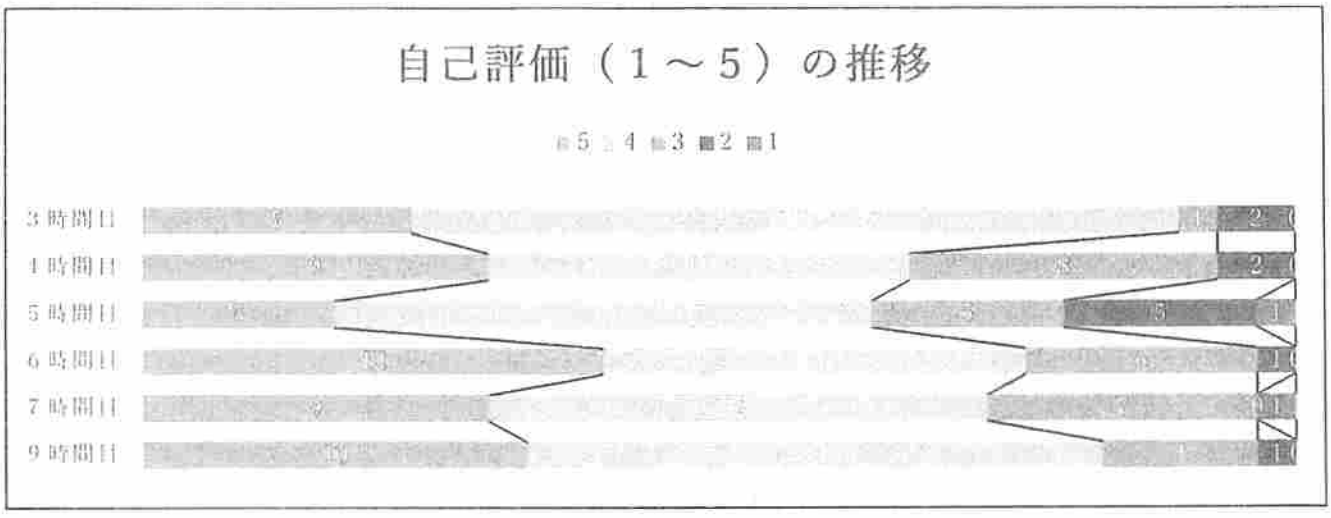
問２　ノートや発表はどうだったか（ノートまとめや発表についての自己評価を４段階でとる）

問３　自分に何かできそうなことはあったか（あった人のみ記述）

問４　今日の感想

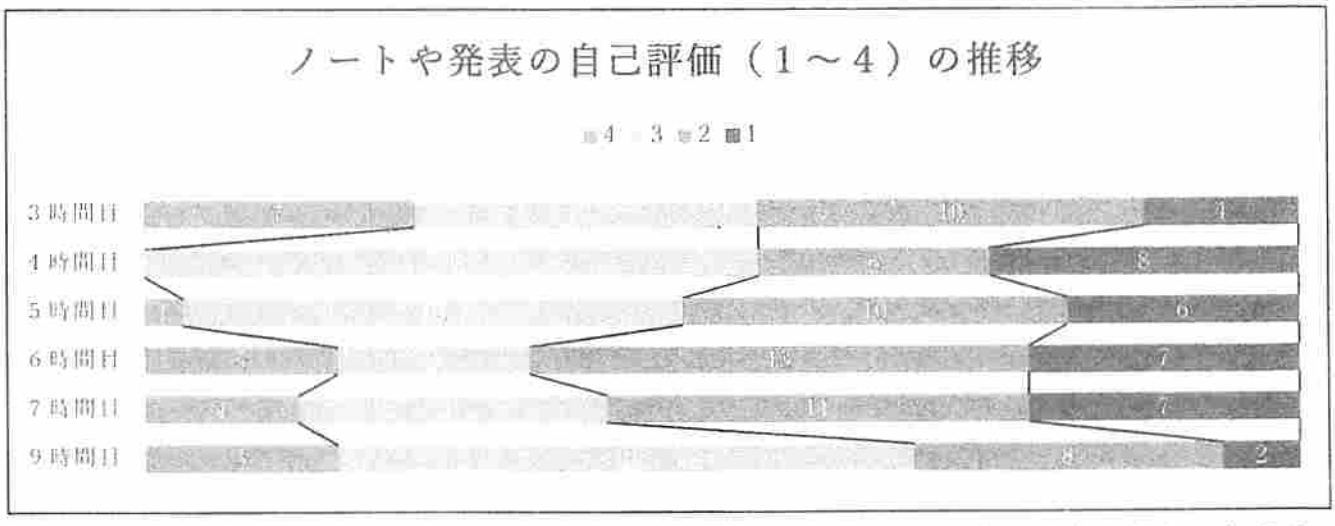
※１時間目は初回の定期アンケートを実施。また、２時間目は学習問題を立てる時間、８時間目はまとめの時間のため実施をしなかった。

問１の結果



３時間目は自宅の地震対策を調べてきたうえで、共有をする時間だったため、児童にとって身近なものを取り扱ったことが高評価につながったと考えられる。

問２の結果



調べてノートにまとめる時間だった３・４・５時間目と比べると、自分の意見をもったうえで話し合い活動をした９時間目の評価が最も高くなっている。

問３の結果（主なもの）

【３時間目（家庭での対策）】
・防災グッズがない家庭への手伝い
・他の家の人の食料が尽きたときに、分けてあげる
・地震が起きたら近所の人と一緒にひなんする。

【４時間目（学校での対策）】
・防災について知っておくことができると思った。
・学校は避難所ということを伝える。
・地域の人たちとひなんすることができる。

【５時間目（市の対策）】
・市の対策を他の人に伝える。
・みんなに呼びかける。

※回答する児童はあまりいなかった。

【６時間目（ゲストティーチャー危機管理室）】
・困っていたら助けるようにする。
・近所の人との交流や助け合い。
・きゅうじょが来なくても地域の人たちと協力して、助ける。
・避難所に行ったら手伝いをする。
・食料を配ること（他２名）

【７時間目（ゲストティーチャー避難所運営）】
・地域の行事に出ようと思った。
・近所の人との 交流、コミュニケーション（他２名）
・いつも挨拶したり、助け合ったりする。（他４名）
・なるべく共助をしていきたい。

【９時間目（単元終了）】
・挨拶などの簡単なことならできる。（他３名）
・あいさつしたりしながら、地域の人との交流をふやしていきたいです。
・助けが必要な人がいたら大人を呼ぶ。
・自分の対策やみんなで助け合う事。
・地域の行事にでること。

学習で調べた内容から考えられることを記述している。自分だけではなく、他の人にかかわることについての記述が多かった。ゲストティーチャーの話を聞いた６時間目以降、「助け合い」「協力」という言葉が増えていき、地域が大切だという意識が高まってきていることが分かる。

問４の結果（主なもの）

【３時間目（家庭での対策）】
・今からできることはやって、地震が起きても大丈夫にしたい。
・ほとんどの家庭が地震の対策をしているんだなと思った。
・緊急連絡先を作ろうと思った。
・知らない防災グッズもあったから、家で使ってみたい。

【４時間目（学校での対策）】
・学校にはいがいに対策されている所が多かった。
・学校もたくさん対策をしていることが分かった。
・和良比防災センターがどんなものなのか知れてよかった。

【５時間目（市の対策）】
・非常食がたくさん用意されていて、びっくりした。（他７名）
・四街道市は避難してきた人たちの食料や水を用意しているとわかったから、紹介したい。
・避難所もたくさんあるのがおどろいた。

【６時間目（ゲストティーチャー危機管理室）】
・ハザードマップを探してみようと思った。（各家庭に配られているため）
・地震が起きたら、自分もできることがあるとわかった。
・自分のことだけじゃなく、他の人の事も考えたいと思った。
・自助、公助、共助があると知った。
・地域で協力することが大切だと思いました。

【７時間目（ゲストティーチャー避難所運営）】
・助け合いが大切だと思った。（他４名）
・自分にできることはたくさんあるんだと思った。
・近所の人と交流することも大切だと思った。
・協力することが大切だとわかった。
・地震が起きたら近所の人と避難しようと思った。
・地域のとりくみが分かった。

【９時間目（単元終了）】
・自助・公助・共助の全部大事だと思いました。（他７名）
・友達の意見を聞いて自分の家で準備をしないといけないと思った。（最初に公助が大切だと思った児童）
・今はまだできないこともあるけれど、自分のできることを考えていきたい。（最初に公助が大切だと思った児童）
・どれも大切だけれど、一番大切なのは自助だと思った。

ゲストティーチャーの話を聞いた６時間目以降、「協力」や「地域」など自分の周りの人に目が向いてきていることが分かる。

資料５　知識の構造図

中心概念

地域の関係諸機関や人々は自然災害に対し、様々な協力をして対処してきた　また、今後想定される災害に対し、様々な備えをしている。

まとめる

社会的事象

- 大地震発生後、避難所となる学校では、地域の人々や市役所の担当者と協力して、いろいろなことを想定して決めていかなくてはならない。さらに、自分がやるべきこと、みんなで協力してやること、市役所の力を借りることなど、役割分担して取り組むことが大切である。
- 四街道市には、自主防災組織という災害時に住民同士が助け合って地域を守る組織がある。市では、この組織と協力して地域を守る活動を行っている。
- 四街道市では、大地震が起きたときに備えて、地域の人々も参加して避難行動計画を立て、地域の人々が協力して避難訓練に取り組んでいる。
- 四街道市では、大地震の発生に備えて、ホームページやパンフレットを作成したり、避難場所の指定を行ったりしている。県や国ともすぐに連絡が取れるようにしている。
- 学校や通学路では、地震に備えて避難訓練をしたり、防災倉庫を設置したり、広域避難地域を定めたりしている。
- 家庭では、地震に備えて避難リュックや転倒防止などの準備をしていたり、災害伝言ダイヤルや避難場所を確認したりするなどの対策をしている。
- 大地震が起きると、建物の倒壊、津波などによって家屋・道路等に多くの被害が出るため、学校は避難所として活用される。
- 千葉県では、過去に大きな地震が発生しており、近年にも大地震の発生する確率がきわめて高い地域である。そのための対策や協力は欠かせない。

用語・語句

- 自分たちにできること
- 共助
- 和良比地区に必要なこと
- 自主防災組織
- 市と住民の協力
- ハザードマップ
- 避難行動計画
- 防災計画
- 津波避難ビル
- 大きな災害時の連携
- 防災倉庫
- 避難訓練
- 災害伝言ダイヤル
- 転倒防止
- 避難用のリュック
- くらしへの影響
- 避難所
- 備えと協力
- 対策
- 災害による被害